

公開シンポジウム「乳幼児の食に迫る：発達保育 実践政策学の根幹」

【日時】 2020年2月1日(土) 13:00-17:00

【会場】 日本学術会議講堂

【主催】 日本学術会議第一部心理学・教育学委員会 【共催】 東京大学大学院
教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター

乳幼児の食を支える保育・教育実践：討論

2020. 2. 1.

小玉重夫(東京大学)

第1部の報告で提起されたこと

- * 栄養による腸の恒常性維持(生死流転、三浦報告)
- * From Probiotics to Psychobiotics(腸内細菌と脳腸連関、須藤報告)

第2部 外山報告

- * 共食する動物としてのヒト
- * 食物分配における三項関係（食を通して世界を知る）
- * 現代における孤食の傾向（食を通しての世界疎外）

第3部 弘中報告

- * 小児の食べる機能の発達と障害
- * 上手に食べる条件(形態、機能、意欲)
- * 口腔機能のスクリーニング
- * ライフステージに応じた口腔機能管理の推進

「個人の心がけの問題」

にしないためには

- * 食からの疎外→栄養からの疎外→機能からの疎外(機能障害) 経済的な条件、社会環境的条件による格差の影響はあるのではないか？
- * 政策的インプリケーション 子ども食堂 食の社会政策
- * 「食を通しての世界疎外」(ex.孤食、居残りの給食、給食中の私語禁止)からの脱却 食素材、食アプリ等の開発
- * →食を通してのインクルーシブ(社会的包摂)は可能か？
- * 食の社会化、食のヘッドスタート、食への社会的アクセシビリティを高めることによって、家庭(親など)の調理スキルや栄養リテラシーに過度に依存する日本の食文化を変革する。